保護者が認知する，高校生の学校教育に抱く期待と満足の構造

松田文子・藤居真路 [1)]

高校生の保護者 611 名に質問紙調査をし，次のことが明らかになった。①保護者は，生徒指導を学習指導及び進路指導と関係させて考えていることが分かった。②保護者は，生徒の学校生活満足度と授業満足度とを評価する際，全学年とも職員による学習指導，進路指導，生徒指導の評価を関与させて考えており，１・２年では生徒の社会規範への遵守の評価も関与させて考えていることが分かった。③保護者は，家庭学習の充実度を評価する際，職員による学習指導，進路指導，生徒指導の評価や生徒の社会規範の評価と関連させて考えていることが分かった。④保護者には，学校総合評価タイプと部活動重視タイプがあることが分かった。

【キーワード：質問紙法，学校生活満足度，授業満足度，高校生の保護者】

問　　題

新しい教育基本法の家庭教育の条項に，保護者に子どもの教育の第一義的責任があることが明記され，家庭教育の場で学校教育の基礎的な力を育てることの重要性が論じられるようになった。家庭における保護者の役割には，当然，しつけに関わる子育てを含んでおり，子どもの人格が完成されるまで継続される。大久保 (2003) は，子どもの離職問題を取り上げ，親が自分の問題として取り組んでいないことを指摘し，成人となった子どもに対する親の役割の必要性を指摘し，親の子どもに対する積極的な関わりが問題解決において重要であると述べている。このことを考えれば分かるように，高校生段階は，義務教育を既に終えているとは言え，人格は未完成であり，保護者が子どもの人格の完成に向けて積極的に関与することが求められている。

学校教育は，知的な能力を高めて，学力を向上させる中心的な場としての役割を担っている。Jackson（1969）が指摘しているように，教室での学習活動には，社会人になるために身につけるべき基本的な考え方や習慣を身に付けていく過程が存在し，子どもに対してしつけを行う場でもある。Babad(2009)は，学校が子ども時代から思春期において社会的な経験をする場であり，教師の役割には①授業者（instructors）と②社会化を促進する者（socializers）との２つの役割があると述べている。その中で Badad は，授業者とは子どもを教え，知的な能力を育て，学力向上を図るものとし，社会化を促進する者とは子どもの価

１）所属：広島県立大門高等学校（福山大学との高大連携校）

値観や社会的自我，文化水準，社会的行為を育てるものであると述べている。

子どもの人格の完成を考えるとき，家庭教育と学校教育は切り離して考えることはできないのであって，学校が果たすべき中心的な役割である学力の向上の問題についても，学校単独で教育が可能であるとは言えない。ベネッセコーポレーション（2003）は，親子の話し合いと子どもの学力との間に関係があることを見出し，学力向上においても親子関係が重要な役割を果たしていることを指摘している。また，平成２１年３月９日に公示された高等学校学習指導要領の中でも，学校教育活動を推進するためには，家庭と連携することが必要であることが明記されたのである。

学校と家庭との連携について，Esptein & Sanders (2000) は，子どもたちを健全に発達させるために，学校と家庭とが教育上の問題の共有化を促進し，連携をとりながら一貫した教育プログラムを作成して取り組む必要があると述べている。また，O' Day (2007) は，学校が説明責任を果たすメカニズムを用いて，学校を取り巻く環境が相互的に影響を与え合うことにより，子どもの学業成績を効果的に伸ばすことが可能であると述べている。

実際，これらの取り組みが成果を上げるためには，学校と家庭等が問題を共有化し，共通した認識を持って子どもの教育に取り組むことが必要であるが，保護者が学校教育に対してどのような期待をしているのかさえ十分に把握されているとは言いがたい。佐藤 (2008) は，小中学校の保護者が学校に対してどのようなことを期待し満足しているのかについて大規模な調査を実施している。その結果，保護者の学校に対する期待は，小学校段階において４因子（生きる力，社会性，準・学力，学力）であり，中学校段階では３因子（学力，社会性，生きる力）であったと述べている。その中で，小学校段階では，学力と受験学力が異なる因子となっているが，中学校段階では，その２つの因子は統合され学力因子となることを見出している。また，満足度は，小学校から中学校への推移において低下し，とくに学力に関する満足度が低下する傾向が見られたことを報告している。その因子構造は，小学校と中学校ともに２因子と決定され，小学校の場合は，第１因子を「学習にかかわる満足度」因子とされ，第２因子を「行事にかかわる満足度」因子とされ，中学校の場合は，第１因子を「学習にかかわる満足度」因子とされ，第２因子を「経験の多様性に対する満足度」とされている。これらの学校に対する期待と満足度について，期待をしているほど満足度が高くなる傾向を見出し，保護者の満足度を上げるためには，学校に対して期待してもらう必要があることを指摘している。こうした調査は，保護者と学校がより効果的に教育活動を実施するための基本的な情報を提供してくれており，学校現場にとっては貴重な方法であるといえる。しかし，保護者の学校に対する期待や満足度に関する調査はまだ十分とは言えず，保護者と学校が協力し合い，より一貫した教育プログラムに基づいて，より効果的な教育実践を行うための示唆的な情報が提供されるように求められている。

こうした状況において，保護者が子どもの授業満足度や学校生活満足度をどのような要因

と関連付けて評価しているのかを解明することを通して，子どもの学校生活に対して保護者がどのような枠組みで認識し評価しているのかを探求することが必要であると言えよう。また，こうした探求を通して，保護者が高校教育に対してどのような価値を置き，期待をしているのかを解明していくための基礎資料を得ることができるであろう。こうした基礎資料をもとに，学校と家庭がよりよく理解して協力し合い，子ども一人ひとりのよりよい発達に向けてより効果的な連携ができるようになると言えるであろう。

また，多くの高校では，家庭学習を推進するための指導が行われている。市川（2004）は，授業内容を定着させるためには家庭学習が必要であると述べている。この家庭学習を含む学習意欲について，和田（2008）は，格差社会の問題を論じる中で，保護者が子どもに対して抱く期待感が，子どものやる気に少なからず影響していることを指摘している。しかし，学校の取り組みや家庭学習の状況について，保護者がどのような認識をしているのか十分に明らかにされておらず，保護者が子どもの家庭学習に対してどのような意識を持ち，その関連要因にどのようなものがあるのか解明していく必要がある。

ところで，本学（福山大学）では，高大連携といった教育機関との連携に関わって多様な事業を行っている。たとえば，高校生向けの講義を開設したり，本大学教員が小・中・高の授業改善のために専門的な指導や助言を行ったりするなどして，授業レベルでの連携事業のを推進させている。本学は，地元の小・中・高校にとって第３者機関として専門性を有する機関であり，小・中・高の学校経営に対する支援的事業を行い，今後さらに地元の研究機関として連携事業を発展的に展開できる可能性を有しているのであり，本学に対する地域社会の期待は小さくないと言えるであろう。本論文は，そのような高大連携の中で生まれたものの一つである。

目　　的

本研究では，高大連携にある高校の学校評価アンケートの結果をもとに，保護者の学校満足度について，下記のような内容について分析して解明することを目的とした。第１に，保護者が，子どもの学校生活や授業に対する満足度を，どのような要因と関連付けて評価しているのかを探究したいと考えた。第２に，子どもの学校生活満足や授業満足に関する保護者の評価は，学年進行にともなう変化があるのかどうかを探求したいと考えた。第３に，満足度という観点から考えたとき，保護者の中にどのようなタイプのものがあるのかを探究したいと考えた。

方　　法

１　調査対象者

広島県東部にある中規模のＡ高校に通学する子どもの保護者を調査対象とした。内訳人数

及び回収率，完全数（全項目について回答してあったものの数），完全率（依頼数に対する，全項目に回答した人数の割合）はTable 1の通りである。A高校は，国立大学に90名程度進学している高校であり，模擬試験の偏差値を伸ばす等，進学面を重視している進学重点校である。

Table 1 質問紙調査の回収率

学年	依頼数	回収数	完全数	完全率（%）
１学年	314	267	195	62.1
２学年	301	283	218	72.4
３学年	310	272	198	63.9
合計	925	832	611	66.1

２　調査用紙

学校評価アンケートは，調査対象者の学校に対する評価や意見を把握し，その後の教育活動の改善に活用するという観点に基づいて，A高校で作成された質問紙であり，平成20年10月から11月にかけて実施された。質問項目は16項目からなり，4件法(「あてはあまる」，「あまりあてはまらない」，「ややあてはまる」，「あてはまらない」）で，A高校の保護者（母親，父親等）に回答してもらった。なお，アンケートの配布と回収は，学級担任から生徒を通して配布し，保護者が回答し生徒から学級担任を通して回収された。なお，調査の全体的なまとめが公表される可能性については，保護者の了解を得ている。

３　分析方法

本研究では，子どもの学校生活満足度と授業満足度について保護者の認識を調べる項目として，項目１「A高校の生徒は，授業について満足している様子である。(以下，「授業満足度」と略す。)」と項目２「A高校の生徒は，学校生活について満足している様子である。(以下，「学校生活満足度」と略す。)」を用いる。これらをフェイスシート項目として取り扱い，その他の項目3から項目16までの項目は，通常の質問項目（以下，「質問項目」と略す。）として扱った（具体的質問項目はTable 2を参照。)。このことをもとにして，以下の分析を行った。

第１に，質問項目が測定している内容を探るために，保護者の回答結果をもとに，各項目間の相関係数を算出し，共通性をSMCにより推定し主因子法を用いて探索的因子分析を行った（芝，1979)。その結果をもとに質問項目について尺度構成を行い，尺度の信頼性を検討するためにα係数を算出した。また，各尺度の得点平均値及び標準偏差値を算出した。第２に，保護者の学校生活や授業に対する満足度が，何によって規定されているのか調べるた

めに，フェイスシート項目（項目１（授業満足度）と項目２（学校生活満足度）と項目３（家庭学習充実度））を目的変数として重回帰分析（芝，1975）を行った。第３に，保護者による生徒の学校生活満足度や生徒の授業満足度への見方に関して，どのような保護者のタイプが潜在的に存在しているのかを探り，その満足度の要因の関与の仕方の違いを調べるために，正準相関分析（芝，1975）を行った。

結　　果

１　因子分析と尺度構成

探索的因子分析を行うために，評定値を間隔尺度とみなして，1～4 点の点数を付与し，14 の質問項目間の相関係数を算出し，その結果をもとに，共通性の推定を SMC で行い，主因法による因子分析を行った。その結果，SMC があまり高くなかったので，因子構造等を考慮に入れて因子数を 4 と決定し，主因子法による因子分析を行い，ヴァリマックス回転を行った。この結果をもとに尺度構成を行い，尺度の信頼性係数を調べるためにα係数を算出した。各尺度の 4 因子への因子負荷量及びα係数は，Table 2 の通りである。なお，各尺度に属する質問項目は，因子負荷量を四角で囲んで表している。

第１因子から構成した測定尺度は，職員の授業や面接，進路指導，生徒指導，補習等への取り組みを肯定的に評価している項目からなっており，「職員による指導のよさ尺度（以下，「指導のよさ」と略す。）」と命名した。この尺度には，職員が生徒に対して行う指導の中で，学力の向上を目指した指導に関する項目が含まれているが，職員が部活動について行う指導は含まれていない。このことから，保護者は，こうした学習指導に関係した職員の指導に対する評価を，生徒指導に対する指導と分けて考えないで評価していることが分かる。次に，第 2 因子から構成した測定尺度は，校則などの規則への遵守や挨拶，清掃に関する項目からなり，社会規範に関する項目が含まれている。そこで，「生徒の社会規範尺度（以下，「社会規範」と略す。）」と命名した。第 3 因子から構成した測定尺度は，広報活動や PTA 活動，施設・美化といった内容であり，学校を外から見た評価に関わる内容である。そこで，「外から見た学校のよさ尺度（以下，「外見のよさ」と略す。）」と命名した。第 4 因子から構成した測定尺度は，職員及び学校の部活動指導の取り組みに関する項目が含まれている。そこで，「部活動指導への熱心さ尺度（以下，「部活動指導」と略す。）」と命名した。

また，家庭学習の項目（「A 高校の生徒は，授業について満足している様子である。」）の因子負荷量から，第１因子（指導のよさ）と第２因子（社会規範）に中程度の因子負荷量が関わっていることが分かる。このことから，保護者が子どもの家庭学習の程度について行う評価は，第１因子（指導のよさ）と第３因子（社会規範）に関与していることが分かる。

Table２　各項目の因子負荷量と各尺度のα係数

項目	指導のよさ	社会規範	外見のよさ	部活動指導
Ａ高校の職員は，一貫した指導方針のもとに生徒指導を行っている。	**0.597**	0.288	0.243	0.254
Ａ高校の職員は，個人面接を積極的に行うなど生徒を大切にしている。	**0.643**	0.155	0.273	0.189
Ａ高校の職員は，分かりやすい授業を工夫し，学力の向上に努めている。	**0.755**	0.222	0.154	0.237
Ａ高校は，カリキュラムや補習など，生徒の学力を向上させる取り組みを行っている。	**0.515**	0.213	0.339	0.230
Ａ高校は，進学や就職に役立つ進路指導をしている。	**0.530**	0.154	0.416	0.231
Ａ高校の生徒は，校則や社会のルールをよく守っている。	0.147	**0.583**	0.067	0.071
Ａ高校の生徒は，挨拶をよくする。	0.187	**0.714**	0.106	0.093
Ａ高校の生徒は，清掃活動をよくする。	0.155	**0.705**	0.224	0.088
Ａ高校は，Ａ高校通信やホームページ，行事などを通じて開かれた学校づくりを積極的に進めている。	0.235	0.153	**0.701**	0.222
Ａ高校は，ＰＴＡ活動の充実や活性化に努めている。	0.289	0.132	**0.655**	0.173
Ａ高校は，校内の美化や施設設備の充実に努めている。	0.240	0.341	**0.510**	0.172
Ａ高校の職員は，部活動の指導や行事に熱心である。	0.292	0.135	0.173	**0.765**
Ａ高校は，部活動を推進する取り組みを行っている。	0.208	0.073	0.348	**0.592**
Ａ高校の生徒は，授業について満足している様子である。	0.399	0.359	0.171	-0.004
α係数	0.856	0.740	0.767	0.737

次に，学年別にフェイスシート質問項目と尺度の平均値と標準偏差値を算出した。その結

果は Table 3 に示す通りである。この結果をもとに，フェイスシート質問項目と尺度別に，学年要因の効果について一元配置による分散分析を行ったが，全て有意ではなかった（森・吉田，1990)。また，フェイスシート質問項目と尺度について，学年別に得点率（合計得点÷満点×100）は 71.3～80.0%であり，項目や尺度によって大きな違いがなかった。しかし，項目１（授業満足度）と尺度２（社会規範）は，学年進行に伴い一貫して平均値が高くなっていた。

Table 3 フェイスシート項目と尺度の学年別平均値と標準偏差

尺度・項目	1年生		2年生		3年生	
	平　均	標準偏差	平　均	標準偏差	平　均	標準偏差
項目1（授業満足度）	2.85	0.59	2.89	0.61	2.93	0.60
項目2（学校満足度）	3.08	0.63	3.10	0.58	2.93	0.69
尺度1（指導のよさ）	3.13	0.49	3.13	0.48	2.99	0.54
尺度2（社会規範）	2.95	0.51	3.04	0.45	3.20	0.52
尺度3（外見のよさ）	3.19	0.45	3.11	0.49	3.06	0.63
尺度4（部活動指導）	3.12	0.58	3.14	0.61	3.12	0.62

（注.　得点範囲は，１～４で，高い得点ほど尺度・項目内容に書かれている特性が高いことを示す。）

２　重回帰分析

フェイスシートの項目１（授業満足度）と項目２（学校生活満足度）を目的変数とし，構成した４つの測定尺度を説明変数として重回帰分析を行った。その結果は Table 4 の通りである。この Table 4 から，保護者による生徒の学校生活満足度の評価について，次のような傾向が見られた。第１に，尺度１（指導のよさ）は，１年生から３年生まで標準回帰係数が有意であり，保護者は項目２（学校生活満足度）の評価を決定する際，尺度１（指導のよさ）の評価を関与させて考えていることが明らかになった。特に，３年生では，この尺度への標準偏回帰係数が 0.5 を超え，１年生と２年生よりも数値的に大きく，重相関係数もより高くなっている。このことから，３年生の保護者は，項目２（学校生活満足度）の評価について，他の尺度と比べて尺度１（指導のよさ）の評価に重点を置いて考えていることが分かった。

第２に，尺度３（社会規範）の評価は，１年生と２年生において標準偏回帰係数が正で有意であり，学年進行とともに標準偏回帰係数が数値上で低下していることが分かった。１年生と２年生の保護者は，生徒が尺度３（社会規範）の評価を項目２（学校生活満足度）の評価に関連させて考えていることが分かった。第３に，尺度４（部活動指導）の評価は，１年生から３年生にかけて標準偏回帰係数が有意でなく，３年生では標準偏回帰係数が負になっている。このことから，３年生の保護者は，尺度４（部活動指導）の評価について項目２（学

校生活満足度)の評価に負の影響を及ぼす要因として認識していることが分かった。第４に，尺度２（外見のよさ）の評価は，２年生において標準偏回帰係数が有意であった。２年生の保護者は，尺度２（外見のよさ）の評価を項目２（学校生活満足度）の評価に関与させて考えていることが分かった。

Table 4　保護者による生徒の生活満足度及び授業満足度を目的変数とした場合の各尺度への標準偏回帰係数

尺度名	授業							
	全体		1年生		2年生		3年生	
	標準偏回帰	有意	標準偏回帰	有意	標準偏回帰	有意	標準偏回帰	有意
指導のよさ	0.583	**	0.532	**	0.498	**	0.708	**
外見のよさ	-0.028		-0.075		0.031		-0.034	
社会規範	0.091	*	0.146	*	0.178	**	-0.014	
部活動指導	-0.035		-0.024		0.030		-0.119	
重相関係数	0.594	**	0.553	**	0.639	**	0.613	**

尺度名	学校生活							
	全体		1年生		2年生		3年生	
	標準偏回帰	有意	標準偏回帰	有意	標準偏回帰	有意	標準偏回帰	有意
指導のよさ	0.329	**	0.285	**	0.222	**	0.503	**
外見のよさ	0.110	*	0.033		0.180	*	0.089	
社会規範	0.128	**	0.177	*	0.165	*	0.089	
部活動指導	0.068		0.140		0.080		-0.039	
重相関係数	0.525	**	0.507	**	0.498	**	0.587	**

（＊＊1%水準、＊5%水準）

次に，保護者による生徒の授業満足度の評価について，次のような傾向が見られた。第１に，尺度１（指導のよさ）の評価は，１年生から３年生まで標準回帰係数が有意であり，保護者は項目１（授業満足度）の評価を考える際，尺度１（指導のよさ）の評価を関与させて考えていることが明らかになった。特に，３年生では，この尺度への標準偏回帰係数が 0.7 を超え，４尺度の中でもっとも高いことが分かった。第２に，尺度３（社会規範）は，１年生と２年生において標準偏回帰係数が正で有意であった。１年生と２年生の保護者は，生徒の尺度３（社会規範）の評価を，項目１（授業満足度）の評価に関連させて考えているが，

３年生の保護者は，生徒が尺度３（社会規範）の評価を，項目１（授業満足度）の評価と負の関係があるものとして捉えていることが分かった。

３　正準相関分析

保護者が項目１（授業満足度）と項目２（学校生活満足度）を評価する際に関連させて考えている尺度があるかどうかを調べるために，目的変数を項目１（授業満足度）と項目２（学校生活満足度）の２項目とし，説明変数を構成した４尺度（尺度１（指導のよさ），尺度２（外見のよさ），尺度３（外見のよさ），尺度４（部活動指導）として正準相関分析を行った。その結果は，Table 5 の通りである。なお，軸数の決定は，各学年の尺度への構成係数のパターンの一貫性を考慮し，２軸とした。

Table 5　目的変数を項目１と項目２にした場合の学年別正準相関分析結果

変数	尺度・項目	全体		1年生		2年生		3年生	
		学校肯定	部活動	学校肯定	部活動	学校肯定	部活動	学校肯定	部活動
説明	指導のよさ	0.984	-0.103	0.962	-0.102	0.951	-0.220	0.994	-0.002
	外見のよさ	0.677	0.569	0.637	0.403	0.716	0.597	0.665	0.567
	社会規範	0.601	0.315	0.671	0.180	0.694	0.159	0.476	0.651
	部活動指導	0.576	0.494	0.588	0.630	0.565	0.365	0.554	0.409
目的	授業満足度	0.932	-0.364	0.935	-0.354	0.954	-0.301	0.898	-0.440
	学校生活満足度	0.812	0.584	0.844	0.536	0.749	0.662	0.857	0.515
	正準相関分析	0.634	0.176	0.588	0.198	0.667	0.172	0.677	0.178
	χ^2係数	330.499	19.188	87.888	7.619	132.256	6.480	124.817	6.267
	自由度	8	3	8	3	8	3	8	3
	有意性	＊＊	＊＊	＊＊		＊＊		＊＊	
冗長	Re(Ｘ / Ｙ)	0.213	0.005	0.184	0.006	0.247	0.004	0.225	0.007
	Re(Ｙ / Ｘ)	0.306	0.007	0.274	0.008	0.327	0.008	0.353	0.007

（＊＊1%水準、＊5%水準）

第１軸については，全体と全ての学年の正準相関係数が有意であったが，第２軸については，全体の正準相関係数だけが有意であった。各学年の第２軸に関する正準相関係数は有意ではなかったが，３年生の部活動タイプを除き，第１軸と第２軸は各尺度の構造係数の構造が類似していることが分かった。具体的には，第１軸は，説明変数及び目的変数の全てにおいて構造係数が高く，他方，第２軸は，説明変数では尺度２（外見のよさ）と尺度４（部活

動指導）の構造係数が高く，目的変数では項目１（授業満足度）については負で中程度の構造係数であり，項目２（学校生活満足度）については正で中程度の構造係数であった。

このことから，第１軸の結果から，全ての４尺度を考慮して生徒の学校生活や授業への満足度を考えている潜在的なタイプがあることが分かった（君山，2006）。このタイプは，４尺度が高ければ高いほど，学校生活満足度と授業満足度との両評価を高くする傾向が見られた。

また，第２軸の結果から，外から見た学校のよさ尺度と部活動の熱心さ尺度を重視して生徒の学校生活や授業への満足度を考えている潜在的なタイプがあることが分かった。このタイは，外から見た学校のよさ尺度と部活動の熱心さ尺度の評価が高ければ，生徒の授業満足度評価を低下させ，生徒の学校生活満足度評価を高く評価する傾向が見られた。

第１軸の正準相関係数は，学年進行にともない一貫して徐々に高まっていたが，第２軸の正準相関係数については，そうした傾向が見られなかった。また，正準相関係数も，第１軸の方が第２軸に比べてかなり大きく有意であったので，保護者の授業や学校生活への満足度に関する考え方は,第１軸タイプが優勢であり,第２軸のタイプは少数派であると言えよう。

これらの第１軸と第２軸の構造上の特徴は，３年生の第２軸以外では，全て一貫性した構造係数のパターンが見られた。なお，第１軸を「学校総合評価タイプ」と名付け，第２軸を「部活動重視タイプ」と名付けた。

考　　察

１　職員の指導のよさの認知について

項目間の因子分析の結果をもとに，尺度構成を行い，α係数で 0.7 以上の信頼性を有する測定尺度を４つ構成できた。

第１因子から作られた尺度１（指導のよさ）は，職員による学習指導や進路指導，生徒指導のよさに関する項目からなっていた。同様に，職員による指導に関係した尺度は，第４因子から作られた尺度４（部活動指導）がある。このことから，保護者は，職員による指導の中で，部活動の指導を，その他の学習指導，進路指導，生徒指導と区別して評価していることが分かった。

また，この尺度１（指導のよさ）の項目内容から，保護者は，学習指導と進路指導と生徒指導を同じ次元で認識しており，特に区別していないと考えることができる。しかし，Jackson のヒドゥン・カリキュラムを考えれば分かるように，教育内容を指導する際には，さまざまな価値観や習慣等が育成されるのであり，保護者が学習指導と進路指導，生徒指導とを結び付けて考えていることは意味があると考えられる。辰野（2002）や Canter(2006)は，学習の効果を上げるためには，教室の秩序が保たれるように様々な形でしつけを行う必要があると述べている。また，中嶋（2000）も，英語が好きになるには学習規律が欠かせな

いとしており，どの教科にもある程度当てはまることであると言えよう。これらのことを考えても，保護者が，教師による学習指導や進路指導などに関わる項目と，生徒指導に関わる項目を同じ次元で考えていることは理解し易いことである。また，保護者に対して生徒指導上の協力を求める際に，学習指導や進路指導の問題と関係付けながら話を進めることは，保護者の考え方に即したものであり，保護者からの理解や協力を得やすいことを示しているとも考えられる。

２　高校生活への満足度に関与する要因

フェイスシートの満足度に関する２項目を目的変数とし，構成した４尺度を説明変数とした重回帰分析の結果から，保護者が生徒の学校生活満足度や授業満足度に関与させて考えている要因を探った。その結果を表にまとめたものが Table 6 である。

この表から，次のことが分かった。第１に，保護者は，全学年を通して生徒の授業や学校生活への満足度の評価を，職員の学習指導や進路指導，生徒指導のよさと関連付けて考えていることが分かった。高校１年生または２年生をもつ保護者は，生徒が校則等の規則や挨拶，掃除を行うことの評価も，授業や学校生活の満足度と関連させて考えていると言えよう。このことから，高校１年生と２年生をもつ保護者は，学習指導や進路指導，生徒指導だけではなく，生徒が挨拶をしたり清掃活動を行ったり校則を守ったりすることも含めて，生徒が高校生活や授業への満足度を持てる環境の要因として評価していると考えられるであろう。

Table 6　保護者による生徒の学校生活及び授業の満足度に関連した要因

関連要因		授業満足度	学校生活満足度	
全学年共通		指導のよさ	指導のよさ	
学年	１年	社会規範	社会規範	
	２年	社会規範	社会規範	外見のよさ
	３年			

第２に，高校３年生の保護者は，学校生活への満足度を，構成した尺度の中で職員の学力向上に向けた指導のよさだけと関連づけていることが分かった。新学習指導要領は，豊かな心や健やかな体の育成について，家庭の教育力の低下に触れ，道徳教育を充実させることの重要性について言及しているが，高校３年生の保護者は，受験が差し迫った問題となる中で，生徒が高校生活満足度への評価事項を学習面だけに関連付けて評価していると考えていると言えよう。このことと，先述した生徒社会規範に関わる尺度が１年生と２年生において生徒の授業満足度や学校生活満足度の評価と関連づけられて評価されていることを併せて考える

と，道徳教育は，１年生と２年生において系統的に学習すれば，生徒の授業や学校生活の満足度に肯定的な影響を持たすことができ，保護者の理解や協力が得やすくなる可能性があると言えよう。と同時に，高校での教育を行っていく上で，３年生であっても，挨拶や清掃活動，校則の遵守は当然必要なのであるから，１年生の時期から，保護者や生徒に対して高校時代を通して学校で指導していくものとして，十分な認識を持たせておく必要があると言えよう。

第３に，部活動指導の熱心さ尺度は，学校生活の満足度に対して１年生から３年生まで通して有意な関連が見られなかっただけではなく，３年生になると，生徒の学校生活への満足度の標準偏回帰係数は負となっている。このことから，３年生の保護者は，生徒の部活動が学校生活への満足度に対して負の関係を持つものとして評価していることが分かった。高等学校学習指導要領では，部活動が特別活動から既に外され，社会体育的要素が持たされるようになったが，保護者は，３年生になると，部活動指導への熱心さが，生徒の学校生活に不満を抱かせる傾向さえあると認識していることが分かった。

３　授業満足度に関与する要因

保護者は，職員の学習指導，進路指導，生徒指導のよさ尺度の評価を生徒の授業満足度に有意に関与させて考えていることが分かった。また，高校１・２年生においては，生徒の授業満足度の評価にも生徒の社会規範のよさ尺度の評価を有意に関連付けて判断していることが分かった。このことから，保護者は，高校１・２年生において，生徒の授業満足度を生徒の社会規範のよさに関連付けて考えていることが分かる。こうした保護者の考え方は，ヒドゥン・カリキュラム（Jackson,1968）において主張されたように，教室における授業にはしつけをともなうのであり，保護者に受容されている考え方の１つであると言える。しかし，生徒の授業満足度の評価について，高校３年生の保護者では，生徒の社会規範のよさの評価への標準偏回帰係数が負となっていることから分かるように，授業に対する見方の中に社会規範に対する価値観を拒否する考え方が生じている可能性があると言える。このことは，高校３年生の授業は，保護者の視点から見たとき，生徒にとって健全な人格形成の場としての位置づけを失い，受験偏重の価値感によって認識される場に変化している可能性を指摘できよう。教育基本法の理念を持ち出すまでもなく，学校の存在意義を考えればすぐに分かるように，入学段階から保護者や生徒に対して教育理念や教育方針を明示し，学校の方針として全人教育を重視することを伝え，受験期であろうとなかろうと，道徳教育や規範意識の育成を重視した教育を行うことが大切であると言えよう。このことは，学校教育の運営方法等が単に生徒や保護者の満足度の調査のみによって決定すべきではなく，教育理念や教育哲学に基づいて方針が決定されていく必要があることを示唆する一例であると考えることもできる。

４　「学校総合評価タイプ」と「部活動重視タイプ」

正準相関分析を通して，全学年全体として見た場合，学校総合評価タイプと部活動重視タイプとがあることが分かった。

学校総合評価タイプは，目的変数であるフェイスシートの２項目と説明変数である全ての４尺度について，構造係数が高かった。特に，尺度１（指導のよさ）がその他の尺度と比べて相対的に構造係数が高く 0.95 以上であり，全学年を通して項目１（授業満足度）の構造係数の方が項目２（学校生活満足度）の構造係数よりも高く 0.89 以上であった。また，学校総合評価タイプは，説明変数の４尺度の評価が高ければ，項目１（授業満足度）も項目２（学校生活満足度）の評価も高くなる傾向があり，本校が目指している学習指導や進路指導，生徒指導，広報施設，社会規範，部活動の全ての領域で高い評価をすればするほど，授業満足度にも学校生活満足度にも高い評価をする傾向があると言える。

それに対して，部活動重視タイプは，正準相関係数が全体では有意であったが，学年別では有意でなかった。しかし，全体と１年生と２年生の説明変数と目的変数の構造変数のパターンが似ており，３年生でも説明変数の尺度３（社会規範）が大きくパターンから外れただけであった。このことから，部活動重視タイプは，人数的には多くはないが，ある一定数１年生から２年生まで存在し，３年生になると若干パターンが崩れてくる可能性があると考えられる。

１学年から３学年の全体で見てみると，部活動重視タイプは，尺度２（外見のよさ）と尺度４（部活動指導）との評価が，項目２（学校生活満足度）の評価と正の関係があり，項目１（授業満足度）の尺度とは負の関係があることが分かった。このタイプでは，説明変数の尺度１（指導のよさ）の構造係数の絶対値が低い負となっており，目的変数の尺度１（授業満足度）の構造係数が低いマイナスとなっていることが分かった。このことから，例えば，本校の部活動指導を高く評価して外見のよさも高く評価していると，学校生活満足度は高く評価するが，授業満足度は低く評価する傾向があると言える。また，外見のよさを低く評価して部活動指導も低く評価していると，学校生活満足度の評価は下げるが，授業満足度は高く評価する傾向があると言える。このことから，保護者の中には，生徒が部活動を中心にして考えており，部活動の善し悪しによって学校生活の満足度を考えていると評価し，また，その学校生活の満足度と授業の満足度とは対立的に捉えている人たちがいると考えられる。このタイプの保護者は，生徒が部活動と勉強の両立をすることができない状態になっていると判断し，この状況は１年生の時から発生していることが分かる。高校は，入学当初から，部活動と勉強との両立の問題が生じており，全体指導やカウンセリング等を通して適切な対応を行い，生徒の抱える問題の解決に向けて取り組む必要があると言えよう。

引用文献

ベネッセコーポレーション 2003　ベネッセが見た教育と学力　日経ＢＰ社

Elisah Babad　2009　The social psychology of the classroom.　New York：Routledge.

市川伸一　2004　学ぶ意欲とスキルを育てる―いま求められる学力向上策―　小学館

Jennifer A. O'Day　2007　Complexity, accountability, and school improvement. In Alan R. Sadovnik (Ed.) Sociology of education: A critical reader. New York: Routledge. Pp.437-460.

Joyce L. Epstein & Mavis G. Sanders　2000　Connecting home, school, and community: New directions for social research.　In Maureen T. Hallinan (Ed.) Handbook of the sociology of education. New York: Springer. Pp.285-306.

君山由良　2006　多変量回帰分析・正準相関分析・多変量分散分析－多変量間の相関と因果関係の因子－　データ分析研究所

Lee Canter　2006　Lee Canter's classroom management for academic success.　The United States of America: Solution Tree.

森敏昭・吉田寿夫（編）　心理学のためのデータ解析テクニカルブック　北大路書房

文部科学省　1999　高等学校学習指導要領（平成１１年３月）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301.htm

文部科学省　2009　高等学校学習指導要領（平成２１年３月）
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/kou/kou.pdf

中嶋洋一　2000　英語好きにする授業マネージメント―３０の技―　明治図書

大久保幸夫　2003　若年雇用に迫る暗い影　市川伸一(編)　学力から人間力へ　教育出版 Pp.23-34.

Philip W. Jackson　1968　Life in Classrooms.　New York:Holt, Rinehart & Winston.

佐藤香　2008　学校教育に対する保護者の期待と満足―学校段階に着目して―　Benesse 教育研究開発センター・朝日新聞社共同調査　学校に対する保護者の意識調査
http://benesse.jp/berd/center/open/report/hogosya_ishiki/2008/hon/hon1_1.html

芝祐順　1975　相関分析法　第２版　東大出版会

芝祐順　1979　因子分析法　第２版　東大出版会

辰野千壽　2002　教室経営の方略－望ましい教室のしつけ－　図書文化

和田一樹　2008　意欲格差　中経出版

【謝辞】本論文作成を含む様々な高大連携の取り組みにおいて，ご助言並びにご協力をいただいております，岡田啓司前校長先生，並びに藤本進現校長先生に対し，心から感謝を申し上げます。

The structure of parents' recognition of their children's expectancy and satisfaction toward their school lives.

Fumiko Matsuda and Shinji Fujii*

To disclose what factors affect the contentment of high-school life and lessons, we constructed four psychometrical measurements. A questionnaire including 14 items on several evaluations of high school life, with three items concerning the contentment toward school life, lessons and homework in the face-sheet, was administered to 611 parents of high school students and analyzed using such psychometrical methods as the factor analysis and the canonical correlation analysis. The main results are as follows. First, there is strong evidence that parents think school counseling and guidance plays an important role in improving the students' academic achievement. Second, parents think that the high-school students' satisfaction with their school life and lessons is significantly influenced by their evaluations on the educational guidance, career guidance and counseling as one of the most influential factors throughout their high-school years. For parents with the freshmen and juniors in high school, the contentment with their children's school life and lessons is linked by their compliance with school regulations and social rules, Third, parents with freshmen or seniors in high school think that the teachers' dedication toward club activities has some negative effect on the students' homework. Fourth, canonical correlation analysis shows that parents with high school students are composed of two types: the general evaluation type and the club activity-centered evaluation type.

Key words: questionnaire, school and lesson contentment, parents

* Daimon high school
(our education connected high school)